岩手大学教育学部研究年報　第81巻（2022.2）35 ～ 51

# 女子大学生の恋愛経験の有無と自尊感情と親子関係の関係性と恋愛教育（RE）のニーズについて

## 恋愛教育プログラムLove Note 3.0の活用についての検証

泉　　光　世*

（2021年11月25日受付，2022年1月13日受理）

### 第1章：研究の背景

**自尊感情と内的要因と恋愛に対する姿勢：**現代の日本社会にいては、若者の恋愛離れが進んでいるといわれている（牛窪,2015; 永久, 寺島, 山崎, 2019）。実際、高坂（2013）、中西（2018）らの大学生に対して行った恋愛に関する調査においては、現在恋人がいると報告していたものは全体の約3割で、大半は恋人がいないという実態が明らかになっている。また、内閣府（2015）が2014年に行った結婚・家族形成に関する意識調査においては、1割強の者が「異性と交際するのが怖いために恋人を欲しいと思わない」と回答していた。また、同調査において、恋人がいないと回答した者に対して異性と交際するうえでの不安について質問した結果、「自分は魅力がないのではないかと思う」（34.2％）、「自分が恋愛感情を抱くことができるか不安だ」（20.5％）という、恋愛に対する自信のなさを表す理由を挙げていた。これらのことから、男女ともに恋愛に消極的な者は自分に自信がないと認識している傾向があることがうかがえる。また、自己評価の低い者は、異性が自分のデートの誘いを受け入れてくれる可能性は低いという思いを抱き、相手からの拒絶を恐れる傾向が高いことが報告されている（松井・山本　1985、遠藤・馬塲・板垣 2011）。また、豊田・松本（2004）は、自己の性格及び容姿の両側面において満足度の高いものほど、高い自尊感情を持つ傾向がある、つまり、性格や容姿に満足していないものは自尊感情が低いということを報告している。さらに、村田ら（2015）が大学生477人（9割が1年生）に対して行った調査研究において、男女ともに約8割の者が異性との交際を求めているが、そのうち3割が異性とのコミュニケーションに抵抗があり、好きな人ができたときに自分からアプローチしない」傾向があると報告していた。また、異性とのコミュニケーションに抵抗がある理由として「自信がない」「恥ずかしい」などを挙げていた。以上の研究から、自己を尊重する「自尊感情/自尊心」を持つことは、若者が健全な恋愛をするためには重要な意味を持ち、それは若者の身体的、内面的自己評価や、コミュニケーション力などと関係していることが明らかになった。

＊　岩手大学大学院教育学研究科

しかし、上記のように若者の恋愛に重要な影響を与える、自尊感情は年々低下傾向にあると指摘されている。小塩ら（2014）の研究では、日本で測定されたRosenberg（1965）の自尊感情尺度の平均値について1980年～ 2013年までの査読誌256研究を分析した結果、中高生や成人においては最近の調査であるほど直線的に自尊感情の平均値が低下している。さらに、大学生では曲線的に変化し近年は低下傾向にあった。上記小塩ら（2014）の報告した自尊感情の経年変化については、白井（2015）も同様の傾向を報告している。

**自尊感情と親子関係：**若者の自尊感情に影響を与える身体的/内面的自己評価やコミュニケーション力など個人内の要因以外の要因として、親子関係が考えられる。松並ら（2012）は、自己を価値あるものとして体験しようとする基本的な欲求である自己愛について、健康的な現れ方と不健康な現れ方の2種類があると述べている。自己愛の健康的な現れ方として「真の意味で自分を愛する」という感覚、「自分は生きている価値がある」と思える自己に対する信頼をセルフラブと定義している。これに対して、セルフラブの欠如/不足により、過度に他者からの注目や賞賛を求めるなど自己を過大評価するという、不健康な現れ方をナルシズムと定義している。この健全なセルフラブの形成については、子どもの頃の親子関係が影響を与えるという報告がされている。さらに、セルフラブが獲得される条件として、子どもの時に他者から愛される経験、特に親との適切な相互交流や両親の子どもへの関与が重要であることが報告されている。豊田・松本（2004）は、大学生の男女150名に対して、以下の8つの要因（①性別②家族統合度③家族関係④両親の養育態度⑤過去の学校生活⑥大学生活⑦自尊心を守る能力⑧自己受容）と自尊心との関連性について検証している。結果、大学生の自尊感情と関連していた要因は、家族統合度、両親との関係、過去の学校生活での得意科目及び充実感があったこと、過去及び現在の大学生活での友人関係、自尊心を守る能力、自己受容などであった。この結果から、大学生の家族や両親との関係性が、大学生の自尊心（自尊感情）の一要因であることが理解できる。また、この研究結果において、回答者の大学生の自尊感情と「親の養育態度」との間には関係性が見られなかった一方で、大学生自身が認知する「家族統合度」（家族のまとまり）、「家族関係」（父親/母親等との関係性）との間には、関係性が見られた。このことは、回答者である大学生が、精神的自立し大人へと成長していく移行期において、実際の親の養育態度よりも、親との関係性における信頼が得られていると認知していることや、家族全体が「うまくいっている」と認知していることの方が、自尊感情と深い関係性があることを示唆している（豊田・松本2004）。この関係性について、鈴山・徳田（2009）、若原（2003）の研究においても同様に、家族関係が子どもに影響を及ぼす際に、両親が夫婦関係や母子関係、父子関係、家族システムの機能状態をどのように評価していたかより、子ども自身の評価がより重要であることが明らかにされている。つまり、実際の家族や両親の関係そのものよりも、若者が、その関係性に対してどのような認識を持っているかという視点で扱うことが重要であるということが示唆されている（鈴山・徳田2009；若原2003）。以上の研究から、若者の自尊感情は、若者が認知する、家族、特に親子関係との間に関連性があることが示唆された。

**親子関係と恋愛観：**上記のように若者の自尊感情と恋愛や親子関係との間に関連性が見られたことから、親子関係と若者の恋愛についても関係性があるのではないかと推測される。実際以下のような報告がされている。宮下・村山（1996）は、親子関係が良好な場合は成

熟した恋愛観が、親子関係が良好でない場合には未熟な恋愛観が形成されると指摘している。加えて、恋愛関係においてデートDVの加害経験の要因として、幼少期の親の態度や、親との関係性を指摘し、恋愛に対する親子関係の重要性を示唆している。また、安岡・窪田（2009）は大学生82名（男子40名、女子42名）を対象として、調査対象者が認知する親子関係が、自らの恋愛観に及ぼす影響に関する研究を行っている。この調査結果では、調査対象者である男女ともに、自分の異性の親の養育態度として、自分が保護され、かつ干渉されすぎない健全な愛情を受けて育てられてきたと認知している者ほど、適切な愛情表現の仕方や愛情の与え方を学び、それらを恋愛対象者に対して伝えられるようになると認識している傾向がみられると報告されている。

以上のことから、若者の自尊感情、親子関係、恋愛観は互いに影響し合う関係にあることが明らかになった。しかし、上記の研究の多くは、大学生の恋愛について、実際の恋愛経験の有無による、自尊感情及び親子関係の間にある関係性の違いについての検証が行われていない。筆者の知る限り、日本の女子大学生の恋愛と親子関係及び自尊感情に関する現状と課題を踏まえ、彼女らが健全な恋愛をするための教育的支援策として、米国で開発された恋愛教育の活用について検証した研究報告は見当たらない。

**Relationship Education＝恋愛関係教育とは：**Relationship Education（RE）は直訳すれば人間関係教育であるが、Darling, Cassidy & Powell（2014）及びPonzetti（2016）は、REについての記述の中で、この教育を受ける対象者は結婚を準備しているカップル、及び成人になったばかりの若者とし、教育内容としては、恋愛関係について適切な判断力のつけかたなどを学び、不健全な関係を回避し、お互いに満足し健全な関係性を築くための適切な態度や行動を実践するために必要な知識やコミュニケーションスキル、性に関することなどを挙げていることから、「人間関係教育」と訳すよりは、「恋愛関係教育」と訳す方が適切であると考えられる。「結婚教育」が主にカップルを対象に実施するのに対して、REはカップルだけではなく個人も対象として高校や大学、コミュニティーセンターなどにおいて実施されている（Darling, Cassidy & Powell ,2014）。

**Love Note 3.0とは：**以下の３つの行動理論・アプローチに基づき作成されている。

（1）Theory of Reasoned Action / Planned Action: 若者が恋愛関係，性行動，個人の成長・発達に関する意思決定をする際に影響する信念や価値観を提示する．

（2）Social Learning Theory: 若者が行動を起こすために，自信を高めたりや行動の許容範囲を広げることを目的とし，若者が行いそうな行動の基本的考え方を提示する．

（3）Youth Development Perspective: 若者が健全な成長・発達を経験するために必要な実際の資源やスキルを提供する．特に若者が実際に活用できる能力を高めるための自信を構築する方法，自分自身を知る方法を伝授する（Ponzetti 2016）

このプログラムはMarline Pearson（2018）によって開発された、16-24歳を対象としたREである。米国内において、ティーネージャーたちの性行動の抑制、及び、コンドームなど避妊具の活用を促進する効果が科学的に実証され、信頼性の高い教育プログラムとして認知されている（Ponzetti 2016）。このプログラムは，実在の人物アントワン・フィッシャーズ氏の半生を描いた実話をもとに創られている。同氏の壮絶な生い立ちから、問題行動を繰り返した後、信頼できる大人と、愛する人との出会いで再生していく同氏の人生を教訓として、若者たちに、自分の過去が現在の自分に影響を及ぼすこと、ありのままの

自分を受け入れ大切にすること、信頼できる大人との出会いの重要性について、理解を深めさせることに中心に構成されている。プログラムの最初に、参加者たちに上記実話が描かれた映画の視聴を促すことで、このプログラムの基本コンセプトの理解できるようになっている。人としての成長と人生の目標を明確にするために,「内省」をすることに重きを置き、恋愛経験や恋人の有無に関係なく、すべての若者たちを対象とした学習内容になっている。具体的な学習内容については、このプログラムのファシリテーターマニュアルの全13章からなる目次をTable9.に示す。学習形態としては、講師一人が複数の参加者にレクチャーをはじめとする、ゲーム、クイズ、ディスカッション、ワークシート、動画鑑賞など様々な手法を取り入れた学習を進めていく。また、学習者が効率的に学習内容を理解できるように構成されているワークブックが用意されており、講義の中で適宜活用される（Pearson 2018）。

また、このプログラムでは、先に述べたように、若者が恋愛を含む、人生において困難な問題に直面した時にその問題を相談できる親を含む「信頼できる大人」の存在が重要な役割を果たすという基本コンセプトを採用している。上記に示した13章の各章の学習のまとめとして「信頼できる大人」とどのように、恋愛や性について話し合ったり相談したりすればよいのか具体的な対応法を提示している（Pearson 2018）。

## 第2章：研究の目的

本研究では、上記先行研究において明らかにされてきたことを踏まえ、特に女子大学生に焦点を当てる。恋愛に関する実態と自尊感情（自尊感情スコア/容姿・性格の満足度）と親子関係（父親/母親との関係性の満足度）、同性/異性とのコミュニケーション力、若者の認知する親の夫婦関係、及び交際相手のいる者に関して恋愛のクオリティーを加え、交際経験の有無におけるこれらの要素についての関係性の違いを探る。加えて、女子大生の恋愛に関する課題と、恋愛教育に対するニーズを明らかにし、米国で開発実践されている恋愛教育プログラムLove Note 3.0（Pearson, 2018）の教育教材の活用の可能性を探ることを目的とする。

## 第3章：研究の方法

**調査時期：**2020年12月
**調査対象：**日本国内の大学生男女100名（男子50名、女子50名）
本研究においては、女子大学生50名のデータを使用した。
**調査方法：**オンライン調査会社に登録している国内に在住する男女大学生各50名ずつに、無記名によるオンラインアンケート調査法を活用し実施した。
**質問項目：**Table1.に示すように、15項目から構成した。質問項目は大学生の恋愛、自尊感情、親子関係の実態や課題を具体化した内容とするために，備考欄に示した関連資料を参考にして作成した。また、現在交際相手が居ると報告した回答者に対して、Table1.に示す交際相手との関係に関する質問項目の第6項目「恋愛の質」に関する5つの設問のスコアを合算し、恋愛の質（Quality of Relationship＝QR）を図るスケールとして活用した。

本研究では、Table1.に示す質問項目のうち、№1, 2, 6, 7, 8, 9, 10, 15の主に恋愛の実態とコミュニケーション力の認知度を含む自尊感情、及び親子関係に関連するものについて、分析・考察を行った。

Table 1.　質問項目

| | 質問項目 | 備考（質問項目の内容作成に関連した参考資料） |
|---|---|---|
| 1 | 属性（年齢・性別・職業・大学種別） | |
| 2 | 恋人・交際経験・告白経験有無 | |
| 3 | 恋愛で得られるもの・失われるもの | 「Love Notes3.0」Pearson（2018） |
| 4 | 恋人に求めるもの・認めてほしいこと | 「Love Notes3.0」Pearson（2018） |
| 5 | 交際時期 | |
| 6 | 恋愛の質<br>●恋人と一緒に居るとき、お互いにありのままの自分でいられるか<br>●恋人に困ったことがあると相談できる<br>●恋人が望むファッションや立ち居振る舞いになるよう努力している<br>●恋人に自分が望むファッションや立ち居振る舞いになるよう努力して欲しい<br>●将来像について話し合う | 大本、坂部（2020）、及び、坂部、大本（2020）<br>「Love Notes3.0」Pearson（2018） |
| 7 | 自尊感情（設問10項目） | 「ローゼンバーグ自尊感情尺度　日本語版」桜井（2000） |
| 8 | 自分の容姿・性格の満足度 | 豊田、松本（2004） |
| 9 | 異性・同性とのコミュニケーション得意度 | 牛窪（2015）及び、大森（2014） |
| 10 | 父母との関係性の満足度・父母の夫婦関係 | 今川（2017）、大森（2014） |
| 11 | 恋愛アドバイスもらう度合い<br>父・母・異性友・同性友 | 今川（2017） |
| 12 | 恋人と交際について周囲の目<br>●周囲お目を気にして交際躊躇 | 高井（2008）、及び、牛窪（2015） |
| 13 | 恋愛の相談相手<br>●交際の相談できる信頼できる大人の有無<br>●交際に関する相談相手<br>●相談相手いない人の解決法<br>●相談相手に求める要素 | 「Love Notes3.0」Pearson（2018） |
| 14 | 疑似恋愛について | 山田（2019）、<br>「Love Notes3.0」Pearson（2018） |
| 15 | 恋愛教育について<br>●受講希望有無<br>●受講形態・学習内容<br>●小中高校で恋愛教育実施に対する意見等 | 「Love Notes3.0」（Pearson , 2018） |

**使用したスケール**

**1．自尊感情：ローゼンバーグの自尊感情尺度（SES）日本語版（桜井　2000）**

以下に示す10項目の設問に対して4段階（1＝はい、2＝どちらかといえばはい、3＝どちらかといえばいいえ、4＝いいえ）のリッカートスケールを用いた。①私は自分に満足している。②私は自分がダメな人間だと思う。③私は自分には見所があると思う。④私は、たいていの人がやれる程度には物事ができる。⑤私には得意に思うことがない。⑥私は自分が役立たずだと感じる。⑦私は自分が、少なくとも他人と同じくらいの価値がある人間だと思う。⑧もう少し自分を尊敬できたらと思う。⑨自分を失敗者だと思いがちである。⑩私は自分に対して前向きの態度をとっている。上記10個の設問のスコアの合算値を自尊感情レベルとして、スコア得点が高いほど自尊感情が高いと判断できるように以下のように修正を加えた。上記10個の設問のうち、①，③，④，⑦，⑧，⑩の設問に関しては、データ処理の際、スケールの段階の順序を以下の通りに変更しデータ処理を施した。（1＝いいえ、2＝どちらかといえばいいえ、3＝どちらかといえばはい、4＝はい）

**1．恋愛の質スケール：**Quality of Relationship Scale＝QRS）

以下に示す5項目の設問に対して4段階（1＝はい、2＝どちらかといえばはい、3＝どちらかといえばいいえ、4＝いいえ）のリッカートスケールを用い、合算したスコアを恋愛の質（Quality of Relationship＝QR）とした。

①恋人と一緒にいるとき、お互いにありのままでいられますか？②恋人に困ったことがあるとき相談できますか？③恋人の望むようなファッションや、立ち居振る舞いになるように努力をしていますか？④相手に自分が望むようなファッションや、立ち居振る舞いになるように努力してほしいですか？⑤恋人と将来の結婚、家族、仕事などの目標や希望について話し合いますか？上記5個の設問のスコアの合算値をQRレベルとして、スコア得点が高いほどQRレベルが高いと判断できるように以下のように修正を加えた。上記5つの設問のうち、①、②、⑤の設問に関しては、データ処理の際、スケールの段階の順序を以下の通りに変更しデータ処理を施した。（1＝いいえ、2＝どちらかといえばいいえ、3＝どちらかといえばはい、4＝はい）

**2．自己満足度（容姿・性格）：**以下に示す2つの設問に対して（1．0～25%、2．26～50%、3．51～75%、4．76～100%）の4段階のリッカートスケールを用いて測定した。スコアが高いほど自己満足度が高いと判断する。①自分の容姿の満足度はどのくらいですか？②自分の性格の満足度はどのくらいですか？

**3．恋性・同性とのコミュニケーション力：**以下に示す2つの設問に対して（1＝得意ではない、2＝あまり得意ではない。3＝どちらかといえば得意、4＝得意）の4段階のリッカートスケールを用いて測定した。①異性とのコミュニケーションをとることは得意ですか？②同性とコミュニケーションをとることは得意ですか？

**4．父母との関係性：**以下に示す2つの設問に関して（1＝満足していない、2＝あまり満足していない、3＝どちらかというと満足している、4＝満足している）の4段階のリッカートスケールを用いて測定した。①自分と母親との関係性に満足していますか？②自分と父親との関係性に満足していますか？

**5．父母の夫婦関係：**以下の設問に対して（1＝とても悪い、2＝悪い、3＝どちらかといえば悪い、4＝どちらかといえばよい、5＝良い、6＝とても良い）の6段階のリッカートスケールを用いて測定した。①母と父の夫婦としての在り方についてどう感じていますか？

**分析方法：**SPSSVersion28を使用し、記述統計、相関関係、Mann-Whitney U検定等の統計学的手法を活用し分析した量的研究である。

**語彙の定義：**

恋愛教育：結婚前の10代半ばから20代半ばの若者が恋愛関係について、不健全な関係を回避し、お互いに満足し健全な関係性を築くために必要な知識について包括的に学ぶ教育。学習を通して、自尊感情の高め方、適切な恋人の選び方、恋人間に起こった問題の解決法、コミュニケーションスキル、信頼関係の深め方、不健全な関係の断ち切り方、性的な関係を持つ際の心構えや、正しい知識やスキルを習得できるもの。

**倫理的配慮：**本研究は、アンケート回答者に事前にアンケートに参加することは強要されるものではないこと、如何なる理由で如何なるタイミングにおいてもアンケートを中断できることを事前に提示し、アンケートに参加することの同意を得て実施している。また、研究の内容及びアンケートの質問項目の内容は岩手大学医学系研究倫理審査委員の承認を得て実施している。

## 第4章：結果と考察

### 1．恋愛の実態（交際経験の有無）

本研究における回答者として全国の男女大学生100名のうち50名の女子についてのデータを分析した。結果、表-3に示す通り、回答者50名中恋人がいると回答したものは8名、交際経験があると回答したものは23名であった。交際経験のある者の方が若干少ないが、ほぼ半数の者が、交際経験があることが明らかになった。（Table2.参照）

Table2.　恋人・交際経験の有無

| | 有（人） | 無（人） | 合計（人） |
|---|---|---|---|
| 恋人 | 8 | 42 | 50 |
| 交際経験 | 23 | 27 | 50 |

### 2．自尊感情・自己満足度（容姿・性格/異性＆同性とのコミュニケーション力）・父母との関係性・父母の夫婦関係

大学生の自尊感情レベル、容姿･性格に関する自己満足度、異性や同性とのコミュニケーション力についての自己評価、父親・母親其々との関係性についての満足度、及び回答者が認知する父母の夫婦関係の在り方についての設問を設定した。これらの設問については、交際経験の有るもの、無いものに区別して結果を算出した。

本研究の回答者である女子大生の認知する、自尊感情、容姿及び性格の自己満足度、同性･異性とのコミュニケーション力、親との関係性に対する満足度、親の夫婦関係の在り方についての結果はTable 3.に示した通りである。また、交際経験の有無によって，これらの要因の数値に違いがあるか検証するために、Mann-Whitney U検定を実施し，その結果をTable 4.に示した。これらの結果から、恋愛関係の有無によって、有意な差がみられたのは、「同性とのコミュニケーション力」と「異性とのコミュニケーション力」の2項目で交際経

験の有るグループの方が、スコアが高いという結果が得られた。つまり、交際経験の有るグループは、同性異性を問わず、交際経験のないグループに比べコミュニケーションに対して自信がある傾向があると考えられる。この結果は、先に述べた村田ら（2015）が行った研究結果と同様に、恋愛に対して積極的な者は、消極的な者に比べコミュニケーション力に自信がある。言い換えれば、恋愛に消極的な者はコミュニケーション力に自信がない傾向があることが明らかになった。しかし、交際経験のあるグループとの違いは、「コミュニケーション」に関するファクターだけで、それ以外に違いはないと言うことも明らかになった。（Table3&4参照）以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育的支援策1（コミュニケーション力向上）**

Table3.　自尊感情・自己満足度・親子関係・両親夫婦関係

| | n | M（*SD*） | | n | M（*SD*） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1.自尊感情 | 交際有（23） | 24.61（4.952） | 5.同性コミュ力 | 交際有（23） | 3.09（.733） |
| | 交際無（27） | 23.19（5.321） | | 交際無（27） | 2.41（.797） |
| 2.容姿満足度 | 交際有（23） | 1.91（.596） | 6.母親関係性 | 交際有（23） | 3.48（.790） |
| | 交際無（27） | 2.19（.736） | | 交際無（27） | 3.30（.724） |
| 3.性格満足度 | 交際有（23） | 2.04（.767） | 7.父親関係性 | 交際有（23） | 3.00（1.087） |
| | 交際無（27） | 2.33（.832） | | 交際無（27） | 2.67（1.000） |
| 4.異性コミュ力 | 交際有（23） | 2.07（1.020） | 8.両親夫婦関係 | 交際有（23） | 4.13（1.740） |
| | 交際無（27） | 1.93（.675） | | 交際無（27） | 3.85（1.586） |

Table4.　Mann-Whitney U検定：恋愛有無による自尊感情・自己満足度・親子関係・親夫婦関係の差

| | 自尊感情 | 容姿満足 | 性格満足 | 異性コミュ | 同性コミュ | 母関係性 | 父関係性 | 親夫婦関係 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| *U* | 274.0 | 243.5 | 255.5 | 175.5 | 169.5 | 258.5 | 249.0 | 273.0 |
| *Z* | -.713 | -1.443 | -1.145 | -2.783 | -2.923 | -1.123 | -1.247 | -0.744 |
| *p* | .476 | .149 | .252 | .005** | .003** | .261 | .212 | .475 |

*p*<.01

次に、交際経験の有るグループと無いグループのそれぞれについて、上記に示した自尊感情、容姿・性格満足度、異性・同性コミュニケーション力、父母との関係性、親の夫婦関係の在り方についての相関関係を検証した。また、交際経験の有るグループについては、これらの項目にQREを加え上記の要因との関係性について検証した。

**交際経験有グループ：**

**1．自尊感情（SES）：**自尊感情と有意な相関関係にあるのは、Table5.に示すように、「異性とのコミュニケーション力」と「両親の夫婦関係の在り方」であった。これは、実際に異性と交際をするという経験の中で、上手にコミュニケーションをとれているという実感を得られた者ほど、自尊感情もそれに比例して高まる傾向があると推察できる。この結果は、先に述べた、村田ら（2015）の研究結果を裏付けするものであった。また、「自尊感情」と「両親の夫婦関係の在り方」との間に相関関係が見られた結果について、子どもだけではなく、親が、自らの夫婦関係が、子どもの自尊感情に影響を与える事を認識し、改善する意識を持つ必要性があると考えられる。以上のことから、以下の3つの教育的支援策が求められ

る。

**教育的支援策1（コミュニケーション力向上）**

**教育的支援策2（自尊感情を高める方法）**

**教育的支援策3（両親が夫婦関係をよりよくする方法）**

**2．QR：**QRに関しては「父親との関係性」との間にのみ、有意な正の相関関係が認められた。この結果から、交際経験があるものにとって、父親との関係性が、交際相手との関係性に影響を与えていることが示唆された。つまり、父親と良い関係を築けている者ほど恋人との関係性も健全であることがいえる。この結果は、安岡・窪田（2009）の行った研究結果を裏付けるものであり、娘が認知する父親と娘の関係性が、娘が恋人との関係に影響を与えると言うことが示された。以上のことから、以下の教育的支援策が求められる。

**教育的支援策4（親子関係構築法）**

**3．容姿と性格満足度：**容姿満足度と性格満足度との間に強い正の相関関係がみられ、自分の容姿に満足しているものほど、性格にも満足しているという傾向がみられた。（Table5.参照）これは、自分の容姿に自信がある者ほど性格にも自信が持てる傾向があることが示唆されている。この結果は、先に述べた豊田・松本（2004）調査研究においても同様の結果が得られている。しかし、容姿に関して自信を持つことは大切なことであるが、容姿に自信が持てないことが性格に自信を持てないことにつながることは、精神的に健全な状態であるとはいえない。このことから以下の教育的支援策が求められる。人間にとって重要なことは内面的なものであり、自らが判断する容姿の美醜によって、内面性を評価することに問題があることに気づかせる教育的支援が必要である（Pearson，2018）。以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育的支援策5（内面性の重要性）**

**4．同性/異性とのコミュニケーション力：**さらに、同性とのコミュニケーション力と異性とのコミュニケーション力との間に強い正の相関関係がみられたことから、同性とのコミュニケーションが得意なものほど、異性とのコミュニケーションも得意だと認知する傾向があることが明らかになった。（Table5.参照）

このことから、同性、異性にかかわらず、人とコミュニケーションを上手にとれるようなコミュニケーション力を高めるために、以下の教育的支援策が求められる。

**教育的支援策1（コミュニケーション力向上）**

**5．父母との関係性：**同性とのコミュニケーション力と「母親との関係性」及び「父親との関係性」との間に正の相関関係がみられた。このことから、同性とのコミュニケーション力があると認知しているものほど、父母との関係性に満足している傾向があることが明らかになった。また、「母親との関係性」と「父親との関係性」との間に強い正の相関関係がみられたことから、母親との関係性がよいものほど父親との関係性もよいと認知しているという傾向が認められた。（Table5.参照）さらに、「母親との関係性」と「父親との関係性」共に「両親の夫婦関係の在り方」と正の相関関係が認められ、特に「父親との関係性」との間に強い相関関係が認められた。このことから、回答者自身の父母との関係性と、両親の夫婦関係との間に関係性があることが示唆された。このことは、交際経験のある者は、調査参加者の認知する、親子関係と、親の夫婦関係が互いに影響し合っており、「家族」としてもつながりを感じていると考えられる。このことから、以下に示す教育的支援策が求

められる。

**教育的支援策1（コミュニケーション力向上）**

**教育的支援策3（両親が夫婦関係をよりよくする方法）**

**教育的支援策4（親子関係構築法）**

Table5. 交際経験有グループ　相関関係

| | SES | QRE | 容姿満足 | 性格満足 | 異性コミュ | 同性コミュ | 母親関係性 | 父親関係性 | 両親夫婦関係 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SES | 1.00 | -.295 | .210 | .229 | .443* | .288 | .196 | .194 | .493* |
| QRE | | 1.00 | -.582 | -.388 | .398 | .272 | .533 | .736* | .519 |
| 容姿満足 | | | 1.00 | .603** | -.136 | -.404 | -.317 | -.419 | -.008 |
| 性格満足 | | | | 1.00 | .130 | -.007 | .167 | .127 | .405 |
| 異性コミュ | | | | | 1.00 | .721** | .345 | .318 | .185 |
| 同性コミュ | | | | | | 1.00 | .503* | .439* | .207 |
| 母親関係性 | | | | | | | 1.00 | .669** | .443* |
| 父親関係性 | | | | | | | | 1.00 | .707** |
| 両親夫婦関係 | | | | | | | | | 1.00 |

$p$*<.05, $p$**<.01

**交際経験無グループ：**次に、交際経験のないグループについての結果を検証する。

**1. 自尊感情（SES）：**自尊感情に関しては、Table6. に示すように「容姿満足度」と「性格満足度」に強い相関関係がみられた。つまり、交際経験のない者の自尊感情は、自らの容姿や性格に対する満足度に強く影響されていると言うことが考えられ、この傾向は交際経験のある者には見られなかった。このことは、交際経験のない者の方が、自分の存在価値を性格や容姿に強く関連付けて捉えていると考えられる。先に述べたように、自分の容姿に自信を持つことは大切なことであるが、それが自分の内面的な価値評価や、存在そのものに対して影響を与えることは健全な状況とはいえない。また、Table6. に示すように「同性とのコミュニケーション」との間に正の相関関係が認められた。この結果は、交際経験のあるグループが「自尊感情」と「異性とのコミュニケーション」との間に、相関関係が見られた結果と異なっていた。これらの結果から考えられるのは、交際経験のあるグループは異性と交際する中で、異性とのコミュニケーションをする機会が多くあると考えられる。しかし、交際経験のないものは異性とのコミュニケーションをとる機会自体が限られているため、それぞれの日頃接する機会の多いものとの経験や体験が自尊感情に影響を与えていることが推察される。以上の結果から、性別に関わらず様々な人とのコミュニケーションがとれるようなスキルや知識を得る必要性がある。以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育支援策1（コミュニケーション力向上）**

**教育的支援策2（自尊感情を高める方法）**

**教育的支援策5（内面性の重要性）**

**2. 容姿と性格満足度：**「容姿満足度」と「性格満足度」との間に、正の相関関係が認められたことから、自分の容姿に満足するものほど性格にも満足している傾向があることが明らかになった。この結果は交際経験があるグループにも同様の傾向が見られた。（Table5&6. 参照）以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育的支援策5（内面性の重要性）**

**3. 同性/異性コミュニケーション力：**さらに、「異性とのコミュニケーション力」と「同性とのコミュニケーション力」との間に正の相関関係が認められたことから、異性とのコミュニケーション力があると認知しているものほど、同性とのコミュニケーション力もあると認知している傾向があることが明らかになった。この結果は、交際経験があるグループも同様の傾向が見られた。（Table5&6.参照）以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育的支援策1（コミュニケーション力向上）**

**4. 父母との関係性：**「父親との関係性」と「母親との関係性」との間に相関関係は見られなかった。また、「父親との関係性」と「両親の夫婦関係の在り方」との間に強い正の相関関係がみられた一方で、「母親との関係性」と「両親の夫婦関係の在り方」に有意な相関関係が認められなかった。このことから、交際経験のないものたちにとって、父親との関係性が、両親の夫婦関係をどのようにとらえるかに影響を与えていると考えられ、父親との関係性の重要性が示唆された。この結果は、「父親との関係性」と「母親との関係性」との間に相関が見られ、また、「親の夫婦関係の在り方」と「父親・母親との関係性」にも有意な相関関係が見られたという交際経験があるグループとの結果とは異なっていた。（Table5&6.参照）これは、交際経験のないものが、「家族」のつながりがどこかで途切れていると捉えているのではないかと推察される。以上のことから、以下に示す教育的支援策が求められる。

**教育的支援策3（両親が夫婦関係をよりよくする方法）**

**教育的支援策4（親子関係構築法）**

Table6. 交際経験無グループ　相関関係

| | SES | 容姿満足 | 性格満足 | 異性コミュ | 同性コミュ | 母親関係性 | 父親関係性 | 両親夫婦関係 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| SES | 1.00 | .589** | .617** | .360 | .434* | -.145 | .123 | -.104 |
| 容姿満足 | | 1.00 | .413* | .004 | .153 | -.146 | .105 | -.014 |
| 性格満足 | | | 1.00 | .079 | .094 | .161 | .046 | .125 |
| 異性コミュ | | | | 1.00 | .410* | -.274 | .294 | -.122 |
| 同性コミュ | | | | | 1.00 | .100 | .091 | -.013 |
| 母親関係性 | | | | | | 1.00 | .125 | .373 |
| 父親関係性 | | | | | | | 1.00 | .542** |
| 両親夫婦関係 | | | | | | | | 1.00 |

*p**<.05, *p***<.01

## 3． 恋愛教育に対するニーズ

本研究における調査では、回答者に対して先に示した通りの「恋愛教育」の定義を明示し、「あなたは大学で恋愛教育を学べる講座が開講されていたら、受講したいですか？」という設問を設定し恋愛教育に対するニーズを明らかにした。結果は、Table7.に示す通り、大学で恋愛教育をオンラインのみ・対面のみ・どちらも受講したいと回答したものを合わせて、本研究の全調査対象者の約6割のものが受講したいと回答していた。また、交際経験有グループ、交際経験なしグループのどちらも、オンラインでの受講なら希望すると回答している者が最も多かった。また、オンラインでの受講は交際経験がある者の方が多い

傾向がみられた。さらに、オンライン・対面に関係なく恋愛教育講座を受講したいと回答しているのは、交際経験がない者の方が多い傾向がにあった。以上の結果から、過半数のものが大学で恋愛教育の講座が開講されていれば受講の希望があることが明らかになり、受講形式としてはオンラインが好まれ、その傾向は恋愛経験がある者に強いことが明らかになった。これは、対面式よりもオンラインの方が個人のプライバシーが守られることが考えられる。

Table7. 恋愛教育受講形式

| | 交際経験有n=23 | | 交際経験無n=27 | | 合計N=50(%) | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | n | % | n | % | n | % |
| オンラインなら受講 | 11 | 47.8 | 9 | 33.3 | 20 | 40.0 |
| 対面式なら受講 | 0 | 0 | 1 | 3.7 | 1 | 2.0 |
| どちらも受講 | 2 | 8.7 | 6 | 22.2 | 8 | 16.0 |
| どちらも受講しない | 10 | 43.5 | 11 | 40.7 | 21 | 42.0 |
| 合　計 | 23 | 100 | 27 | 100 | 50 | 100 |

次に、回答者に「あなたが恋愛教育を大学で学ぶとしたらどんなことを学びたいですか？」という問いに対して、Table8.の10項目の学習内容の中から複数回答可として自由に選択するような設問を設定した。交際経験有グループ23名中の最も多くの11名（47.8%）ものが「自尊感情」と「信頼関係の築き方」を選択していた。次に10名（43.5%）のものが「コミュニケーションスキル」と「親・友人などとの人間関係の構築の仕方」、3番目に多く選択していたのは「恋人の選び方」で、6名（26.1%）のものが選択していた。

それに対して、交際経験がないもグループの最も多くのもの、27名中15名（55.6%）のものが「コミュニケーションスキル」を選択していた。次いで、12名（44.4%）のものが「自尊感情」、3番目に多かったのは「親/友人などとの人間関係の構築の仕方」で11名（37.0%）が選択していた。

以上の結果から、交際経験の有るものは自尊感情や信頼関係の構築の仕方などメンタルに関する学習内容を希望する傾向があったことは、天谷（2007）の研究において恋愛経験のある者の方が、他者に対して不信感を抱く傾向があるという結果を裏付けするものであると考えられる。この結果から、交際相手との関係の中で、自尊感情が傷つけられたり、信頼関係をうまく築けなかったりするような経験をする機会が多くなることが推察される。また、コミュニケーションスキルや、恋人の選び方が上位に上がっていることから、交際経験を通して生じる様々な問題を解決するための方策や、今後、新たな関係性を求めている傾向が伺える。このことから、これらの学習内容について学んでみたいと思う者が多く見られたのではないかと考えられる。一方、交際がないグループに関しては、最も多くのものが「自尊感情」を選び、コミュニケーションスキルルを学んでみたいと考える者が2番目、3番目には親・友人との人間関係の構築法が選ばれていた。交際経験がないグループは、学んでみたい学習内容として上位3位の中に「恋人の選び方」選ばれていなかった。このことは、恋人を選ぶ前に、コミュニケーション力、自尊感情の向上など、自分自身を高めるための知識やスキルを習得し、親・友人など身近な人との関係性を改善する必

要があると捉えているのではないかと推察される。

両グループとも「性に関する知識」「別れ方」などは、比較的選択する者が少ない傾向が共通してみられた。これらの学習内容に関しては個々の価値観や経験など、個人のプライバシーに関する事柄であり、信頼関係が築けていない自分以外の他者と公の場で共有しづらい内容であると捉えられた可能性がある。また、「SNSの活用法」については、両グループとも、ごくわずかの者しか選択していなかった。これは、質問項目が書かれた画面上に、この項目が、SNSを通した性被害などに関わる問題についての対応策などを学べるという具体的な学習内容についての説明を明示しなかったことが一因として考えられる。

Table8. 恋愛教育における教育内容

| 学習内容 | 自尊感情 | 恋人選び方 | 問題解決 | コミュスキル | 信頼関係築き方 | 別れ方 | 性的問題 | SNSの活用法 | 親・友人人間関係 | その他 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 交際経験有n=23 | 11 | 6 | 5 | 10 | 11 | 5 | 5 | 3 | 10 | 0 |
| (%) | 47.8 | 26.1 | 21.7 | 43.5 | 47.8 | 21.7 | 21.7 | 13 | 43.5 | 0 |
| 交際経験無n=27 | 12 | 10 | 10 | 15 | 8 | 5 | 7 | 4 | 11 | 1 |
| (%) | 44.4 | 37.0 | 37.0 | 55.6 | 29.6 | 18.5 | 25.9 | 14.8 | 40.7 | 3.7 |

## 4. LOVE NOTE 3.0の活用の検証

本研究において行った調査結果から、調査参加者である女子大学生に求められる教育的支援策の内容と、彼女らが学んでみたい恋愛教育の学習内容が、先に述べた米国のREプログラムLOVE NOTE3.0（Pearson 2018）の教育内容が網羅しているか検証した。（Table9. 参照）Table9. が示すとおり、本研究の調査結果から導かれた、女子大生に対する教育的支援策及び、恋愛教育において学んでみたい学習内容の上位3項目は、米国REプログラムLOVE NOTE 3.0（Pearson 2018）の教材の内容に網羅されていることが明らかになった。

Table9.　LOVE NOTE3.0の学習内容と求められる教育的支援策

| Love Notes 3.0 | | 求められる教育的支援策 | 学びたい学習内容ベスト3（表内数字は順位を表す） | |
|---|---|---|---|---|
| テキスト目次 | 学習内容の概要 | 本文中支援策番号 | 交際有り | 交際無 |
| 1.現代の恋愛 | 恋愛関係の重要性・パートナーの選び方 | 2；4；5 | 3．恋人選び方 | |
| 2.自分自身を知る | 全ての良い人間関係は自分を知り，健全な内面からはじまる，求める将来像，家族の起源 | 2；4；5 | 1.自尊感情<br>2.親/友人人間関係 | 2.自尊感情 |
| 3.私の期待―私の将来 | 恋愛関係や相手に求めること，自分にとって何が大切か知る，将来の家族・子ども・責任・結婚を考える | 4；5 | 1.自尊感情 | 2.自尊感情 |
| 4.魅力と恋愛の始まり | 健全な恋愛関係とは何かについて考える，異性に惹かれること，恋と愛の違いについて | 2；4；5 | 3.恋人選び方 | |
| 5.賢い恋愛関係の法則 | 恋愛関係の中の意思決定/賢明な恋愛について | 2；4；5 | 1.自尊感情<br>1.信頼関係 | 2.自尊感情 |
| 6.それは健全な恋愛関係？ | 男女間の健全・不健全な関係の見極め方，恋人との別れ方/別れた後に前に進む方法 | 2；4；5 | 1.自尊感情<br>1.信頼関係 | 2.自尊感情 |

| Love Notes 3.0 | | 求められる教育的支援策 | 学びたい学習内容ベスト3（表内数字は順位を表す） | |
|---|---|---|---|---|
| テキスト目次 | 学習内容の概要 | 本文中支援策番号 | 交際有り | 交際無 |
| 7.危険な愛 | 肉体的・心的・性的暴力，ストーカー，見極め方，子どもへの影響，人としての尊厳・尊重 | 2；4；5 | 1.自尊感情 | 2.自尊感情 |
| 8.決断，なし崩しは×！恋愛の危険を軽減する | 恋愛関係・性行為を始めること，続けることは意思を持って「決断」することが重要 | 2；4；5 | 1.自尊感情<br>1.信頼関係 | 2.自尊感情 |
| 9.コミュニケーションで何を得るの？ | 全ての人間関係におけるコミュニケーションと葛藤の対処法，けんかをしそうな時の会話法 | 1；4 | 2.コミュスキル<br>2.親/友人人間関係 | 1.コミュスキル<br>3.親/友人との関係 |
| 10.コミュニケーションの挑戦とより多くのスキル | 問題が生じるときのコミュニケーションのパターンを知る，表面化していない問題の対処方法 | 1；4 | 2.コミュスキル<br>2.親/友人人間関係 | 1コミュスキル<br>3.親/友人との関係 |
| 11.SEXについて話そう | 性行為，性感染症及び避妊に関する意思決定， | 4 | | |
| 12.SEXの選択・計画 | 性行為に関する意思決定，性の価値，位置づけ， | 4 | | |
| 13.子どもの目を通した家族 | 若くして子どもを持つことのデメリット | 4 | | |
| 14.テクノロジーとソーシャルメディア | 現実とヴァーチャル，SNS恋愛や性的メッセージの危険性，ネットいじめ・ポルノの影響と実態 | 4 | | |

また、先に述べたようにLOVE NOTE3.0（Pearson 2018）のプログラムマニュアルの各章の最後に、親を含む「信頼できる大人」と、恋愛や性に関して、どのような会話を、どのようにすれば良いのか、具体的に教示されている。そして、その話し合いの結果信頼できる大人から、若者に対してメッセージやコメントをもらう書き込み式のシートが提示されている。このことから、父母との関係性の築き方を学ぶ教育的支援策4 に関しては、Table9.に示してあるテキストのコミュニケーションに関する章だけではなく、プログラム全体を通して、恋愛や性、人間関係，そして人生に関する全てのことについて包括的に、より良い関係性の築き方が学べるように構成されている（Pearson 2018）。これらのことから、米国REプログラムLove Notes 3.0（Pearson 2018）は、本研究における調査参加者に対して活用できる可能性が示唆された。

教育的支援策3に関しては、女子大生に対する教育的支援ではなく、その親に対する支援策であるため、このLOVE NOTE3.0には含まれていない。対応策として、大学生を子どもに持つような、長年夫婦を続けている夫婦のための、夫婦関係改善のための教育的支援が望まれる。

## 第5章：総括

本研究では、女子大学生に焦点を絞り、交際関係の有無による、親子関係や自尊感情に関連するファクターとの関係性について検証した。調査結果から、半数弱のものに交際経験があることが明らかになった。

交際経験のある者、ない者の両グループに共通して見られた傾向は、同性と異性とのコ

ミュニケーション力との間に見られた相関関係があること、及び容姿と性格の満足度の間に見られた相関関係があることであった。

上記両グループの異なる傾向は以下に示す通りである。

1．交際経験のあるグループより交際経験のないグループの方が、同性・異性とのコミュニケーション力が低い。

2. 交際経験のあるグループは自尊感情と「容姿」「性格」の満足度のどちらとも関係性が見られなかったが、交際経験のないグループには関係性が認められた。これは、交際経験がないものほど、自分の容姿や性格と自分の存在価値を関連付けて考える傾向があることが推察される。

3．交際経験のある者は「異性とのコミュニケーション」が得意なものほど、自尊感情が高い傾向が見られ、これは実際に異性とコミュニケーションをする機会に恵まれ、その経験が、彼女らの自尊感情に影響を与えていると考えられる。それに対して、交際経験のないものは「同性とのコミュニケーション」が得意なものほど、自尊感情が高い傾向が見られた。この結果の違いについては、日頃よく交流する者の性別によると考えられる。

4．交際経験のあるグループに関しては、同性とのコミュニケーション力と、父母との関係性の満足度との間に関係性が認められたが、交際経験のないグループでは認められなかった。

5．交際経験のある者は「父親との関係」と「母親との関係」との間に強い相関関係が見られ、また、父母それぞれの関係性と「親の夫婦関係の在り方」との間に相関関係が見られた。それに対して、交際経験のないものは、「父親との関係性」と「母親との関係性」との間に相関関係は認められず、「親の夫婦関係の在り方」と「父親との関係性」のみにしか相関関係が見られなかった。これらの結果から、交際経験のある者は、調査参加者の認知する親子関係と、親の夫婦関係が互いに影響し合っており、「家族」としてもつながりを感じているが、交際関係のないものは「家族」のつながりがどこかで途切れていると捉えていると考えられる。

6．現在恋人がいると答えた者の、恋人との関係性の質を示したQRは、「父親との関係性」のみと相関関係が認められたことから、異性の親との望ましい関係性が恋人との関係性のクオリティーも高める傾向があることが明らかになった。

以上、本研究で得られた調査結果より、交際経験の有無にかかわらず、女子大生自身の自尊感情や、コミュニケーション力を高めることが、恋愛には重要なファクターであることが明らかになった。また、交際経験のある者とないものとでは、自尊感情や親子関係や親の夫婦関係など家族間の関係性などに、違いが認められる。特に、交際経験のある者の方が、交際経験のないものよりも「家族としての繋がり」を感じ取っている傾向があることが浮き彫りになったことは、注視するべき点であると考えられる。

先に述べたように、女子大学生が自尊感情やコミュニケーション力をはじめとする、恋愛に関する知識やスキルを習得するための教育的支援策が求められる。その一つの方策として米国で開発されたLove Notes 3.0等のREプログラムを参考に、日本の女子大学生の実情とニーズ、及び言語や文化的な面な違いを考慮し、彼女らに適した独自の恋愛教育プログラムを開発し、教育的支援を実施していくことが求められる。加えて、「家族全体の関係性」を改善するためには、女子大学生の「親の夫婦関係」を改善していくことの必要性

も示唆された。この課題については、泉（2021）が提唱する、中高年者のための夫婦関係を改善するマリッジエデュケーション（ME）の活用が一つの方策として考えられる。女子大学生の恋愛支援をするためには、当事者のみならず、全ての若者や子どもを持つ親も、親子・恋人・夫婦などの関係性における、それぞれの抱える課題/問題を解決/改善するためのスキルや知識を学ぶことが望まれる。また、この研究で焦点を当てた米国の恋愛教育プログラムLove Note 3.0ではTable 9に示すように、プログラムマニュアルの中に「13. 子どもの目を通した家族」という項目を設定している。内容としては、夫婦・パートナーとの関係が、如何に子どもたちの心身の発達や、学業などに影響を及ぼすのかを伝えている。良好な夫婦関係を築くことは、自分たちだけのためではなく、次の世代の子どもたちを健全に育成し、その子どもたちが健全な恋愛や結婚をするためにも重要なことであることを若い世代に伝えていく必要がある。

以上のことから、若者の親たちの夫婦関係の改善だけではなく、子どもを持ちたいと考える若者たちに、次の世代の子どもたちのためにも、自分たちの夫婦やパートナーとの関係性を良好に保つための知識やスキルを伝えていかなければならない。そのためには、日本における個人や世代のニーズ等状況に応じたREやMEの教材の開発、指導者の育成、教育の場の設置など総合的な恋愛・結婚教育のシステム作りが求められる。

## 引用文献


1．牛窪恵『恋愛しない若者たち　コンビニ化する性とコスパ化する結婚』（ディスカヴァー・トゥエンティワン,2015）

2．永久ひさ子・寺島 拓幸・山崎 幸子「未婚男女における恋愛意欲と対人志向性の関連：若者の恋愛離れと「おひとりさま」志向」（『文京学院大学総合研究所紀要』第19号, 2019,143-154頁）

3．高坂康雅「青年期における“恋人を欲しいと思わない”理由と自我発達との関連」（『発達心理研究』, 第24号,第3巻,2013,284-294 頁）

4．中西祐子「現代大学生恋愛事情―ロマンティック・ラブ/コンフルエント・ラブ/草食化―」（『シオロジスト』武蔵大学社会学,20号第1巻，2018, 1-47頁）

5．内閣府政府統括官,「結婚・家族形成に関する意識調査報告書」（2015）https://www8.cao.go.jp/shoushi/shoushika/research/h26/zentai-pdf/index.html

6．松井豊・山本真理子「異性交際の対象選択に及ぼす外見的印象と自己評価の影響」（『社会心理学研究』第1号, 第1巻,1985,9-14頁）

7．遠藤健治･馬塲靖子･板垣瑠衣「女子大生の恋愛と自尊感情」（『The AGU Journal of Psychology』第11号, 2011,49-62頁）

8．豊田加奈子・松本恒之「大学生の自尊心と関連する諸要因に関する研究」（『東洋大学人間科学総合研究所紀要』第1号,2004,38-54頁）

9．村田諒・佐野紫織・児玉千恵・田中さゆり・坂口さゆみ・芳賀亜紀子・徳武千足・米山美希・金井誠・市川元基・大平雅美「大学生の生活と対人関係および恋愛・結婚に対する意識について」（『長野県母子衛生学会誌』第17号,2015,18-25頁）

10. 小塩真司・岡田涼・茂垣まどか・並川努・脇田貴文「自尊感情平均値に及ぼす年齢と調査年の影響－Rosenbergの自尊感情尺度日本語版のメタ分析－」（『教育心理学研究』第62号,2014,273-282頁）

11．Rosenberg, M. *Society and the adolescent self-image*（Princeton University Press, Princeton,NJ, 1965）。
12. 白井利明「自尊感情を高める教育実践を再考する」（『大阪教育大学紀要Ⅳ』第64号第1巻, 2015,147-156頁）
13. 松並知子・青野篤子・赤沢淳子・井ノ崎敦子・上野淳子「デートDVの実態と心理的要因―自己愛との関連を中心に―」（神戸女学院大学機関リポジトリ『助成額評論』第26号,2012,43-65頁）
14. 鈴山可奈子・徳田智代「夫婦関係および家族システムの機能状態が青年期の不安に及ぼす影響」（『家族心理学研究』第23号,第1巻,2009,1-11頁）
15. 宮下一博・村山真澄「青年における恋愛観と親子関係」（『千葉大学教育学部研究紀要教育科学編』第44号,1996,13-17頁）
16. 若原まどか「青年が認識する親への愛情や尊敬と、同一視および充実感との関連」（『発達心理学研究』第14号,第1,2003,39-50頁）
17. 安岡佐和子・窪田由紀「親子関係が恋愛に及ぼす影響 - 異性親と子の関係を中心に－」（『九州産業大学院　臨床心理学論集』第4号, 2009,71-82頁）
18. Darling,C. A., Cassidy, D. & Powell,L., *Family Life Education*：*Working with Families across the Lifespan,*（Waveland Press,Long Grove,IL,2016）
19. Ponzetti, James. Jr., *Evidence-based Approaches to Relationship and Marriage Education*,（Routledge Press, NY,2016）
20. Marline, Pearson, *Love Notes 3.0*：*Relationship Skills for Love, Life, and Work*,（The Dibble Institute, CA, 2018）
21. 大本久美子・坂部涼：「他者との関係構築に関する質的調査―良好な関係を築く要素に焦点を当てて―」（『生活文化研究』,vo1.57,2020,11-18頁）
22. 坂部涼・大本久美子：「高等学校家庭科におけるパートナーとの関係に関する学習プログラムの開発」（『生活文化研究』,vo1.57，2020,19-28頁）
23. 桜井茂男「ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版の検討」（『筑波大学発達臨床心理学研究』第12号,2000,65-71頁）
24. 大森美佐「日本の若年独身者における親密性：性行動内容に注目して」（『人間文化創成科学論叢』,19,2016,135-143頁）
25. 今川真治「恋愛や結婚に関する親とのコミュニケーションと大学生の結婚観との関連」（『広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部,66,2017,213-222頁』
26. 高井範子「対人関係の視点による生き方態度の発達的研究」（『教育心理学研究』,47（3）,1999,317-327頁）
27. 山田昌弘「恋愛・結婚の衰退とバーチャル関係の興隆」（『生活福祉研究：明治安田生活福祉研究所調査報』，97,2019,20-33頁）
28. 天谷祐子「恋愛経験・恋人の有無による恋愛観・一体感・信頼感の変動－大学生を対象として」（『東海学園大学研究紀要』第12号,2007,17-31頁）
29. 泉光世「中高年者の夫婦関係の実態とシニアマレッジエデュケーション（SME）に対するニーズアセスメント：米国MEプログラムプログラムELEVATEの活用の検討」（『家族関係学』，40,2021,113-120頁）

（引用順）